

# トマス・ハーディの詩における文体分析と解釈

鈴木 理 枝

## 序

ハーディは1895年に「*Jude the Obscure* 日陰者ジュード」を出版後、激しい批判を受けた後、小説家としての筆を折り、かねてからの希望であった詩作に専念した。1898年、第一詩集「ウエセックス詩集」が出版され、亡くなる1928年までに約950篇以上の詩を創作した。ここでは特に、ハーディの宗教観に着目し、彼の思想の根底にある、Immanent Will-盲目意思が詩の文体上にいかに表わされ、詩の内容に影響を与えているか考察する。

アームストロングがハーディとキリスト教との関係について次のように示している。

Hardy's relation to Christianity and its texts is a particularly intense one, typical of those late Victorians for whom the 'death of God' left a palpable absence — a God-shaped hole — which could not simply be a matter of indifference.

Yet Hardy was, he always insisted, 'Churchy' — he attended services all his life, retained a strong interest in church music, read the Bible regularly, and used religious ideas widely in his novels. In his poetry, poems on religious themes range from tales taken from the Bible and apocrypha to direct speculations about (or even interrogations of) God. As late as the 'Apology' to *Late Lyrics and Earlier* (1922) he expressed hopes for a reformed and rational Christianity. Armstrong T. (1993) (16-17)

このことから、彼は形式的及び伝統的なクリスチャンとしての人生を送ったことが推察される。生涯教会生活、つまり礼拝に出席することにより、信仰とは異なる当時のヴィクトリア朝のキリスト教形式を身につけ、これらの習慣及び彼の伝統的および形式的思想が彼の文体を生み出していると推察する。

ここではハーディの数多くの詩の中から、詩の主題が明確に表現されている、つまり、盲目意思に関連する3篇の詩、*The Oxen*, *Hap*, *Neutral Tones* を取り上げる。

Carter R. (1993) がハーディの文法使用は詩を通してパターン化しており、普遍的で、統制されていることを認識するという。

まず、ハーディの文体に焦点をあて、文法的分析を試みたいと思う。文法分析のみでハーディの詩を全て解釈することはできないが、少なくとも、文体から彼の文法的パターン、あるいは彼の意図することを解釈できると推察する。ここでは特に、時制、代名詞、助動詞、名詞句、動詞句、節の構造を分析し、ハーディの文法的選択がいかに意味の解釈に貢献しているか考察し、ハーディの思想の根底に根ざした盲目意思が文脈の中でいかに表わされているか検証する。

時制、助動詞の分析に関しては、Greenbaum S. & Quirk R. (1990) の方法論を参照し、代名詞、名詞句、動詞句の分析は Crystal D. の方法論を参照し、主節の構造の分析を Berry M., *An Introduction to Systemic Linguistics, I Structures and Systems* の方法論を参照し、Subject 主部, Predicator 述部, Complement 補語, Adjunct 付接詞に分類した。(節あるいは文の基本構造の一部に組み込まれて動詞を修飾する。たとえば、時、場所、頻度、程度、様態を示す副詞は付接詞である。)

1 篇ずつ詩の内容を見ながら、それぞれ文法分析し、これらの分析が、詩の内容を確認し、詩の主題に関連しているか考察したい。

## I

まず、*The Oxen* について考察する。この詩は1915年に書かれており、ベイリー J.O. (1970) はフローレンス・ハーディ夫人がアルダ、レイディーホアレに1917年1月7日、書き送ったと記している。“クリスマスイヴの真夜中に雄牛たちが馬小屋でひざまずいていたという伝説をハーディに話したのは、もちろん彼の母親であった。彼は様々なところからその伝説を聞いたかもしれない”と言明している。

この詩の時代背景は19世紀末から20世紀初頭にかけて、宗教的価値観がしみわたったヴィクトリア時代である。ダーウィンが「種の起源」を発表、ボーア戦争、第1次世界大戦の勃発と様々な社会の変動の激動期に社会の価値観が根底から覆され、幼い頃、母から聞いた、クリスマスイヴの真夜中に雄牛たちが馬小屋でひざまずいていたという伝説に思いをはせて書かれた *The Oxen* には、ハーディの宗教観および人生観が非常に明確に表わされている。

この詩の中で時制がどのように使用されているか記述し、コンテキストの意味を調べてみる。Greenbaum & Quirk の時制は動詞の変化によって示された文法的区分である。英語は動詞の未来形に変化した形式がないので、3倍の意味の対照が2つの時制に限定されている。すなわち現在時制と過去時制は典型的にそれぞれ現在と過去の時間を指している。時制の分析を通して、時制がどのように働いているか、語り手の視点および感情の動きを検証する。

表1 *The Oxen* 雄牛たち

時制の分析結果 Tense Analyses: Methodology of Greenbaum S. & Quirk R. (1990)

	1 <sup>st</sup> stanza	2 <sup>nd</sup> stanza	3 <sup>rd</sup> stanza	4 <sup>th</sup> stanza
Present tense (state) 状態現在	1	—	1	—
Present tense (habitual) 習慣的現在	—	—	2	1
Past tense (event) 出来事過去	2	2	—	1
Past tense (habitual) 習慣的過去	—	2	1	1
Past tense (hypothetical) 仮想的過去	—	—	1	1

1連では、2つの現在時制2つの main verb (is) が省略されている。最初の1連、2連において、現在時制を除き、過去時制 (said, sat, pictured, dwelt, did occur, were kneeling) が使用されている。語り手の視点から、現在クリスマスイヴの12時であり、過去を回想していることがわかる。すなわち、宗教的環境、雄牛でさえクリスマスイヴにはイエス・キリストの誕生を待ち望んでいる環境である。しかし、語り手はこの宗教的環境を冷静かつ冷めた視点でそれを見ている。後半の3連、4連において、現在時制 (feel, come, see, hoping) と過去時制 (would weave, said, used to know, should go, might be) が混在している。宗教的環境においての安らぎ、平安が感じられる連である。

ベイリーは“後半の2連は最初の2連の伝説についてのハーディの気持ちを表現したものであり、老人達が座っており、(家族のくつろぎの中で) 雄牛がひざまずくのを疑わない群れ、すなわちキリスト教徒である。第1次世界大戦のその当時、彼はその群れと共に神の存在を信じる事ができなかった”と語っている。

語り手は現在の不確実性の中で生きることによってこれまでの社会の価値観と、急激な変化の中での価値観の間で混乱しているのだと考える。つまり、彼は第1次世界大戦、社会の矛盾に対して、嘆き悲しんでいる。時制の使用は語り手が過去の出来事を回想していることを示しており、ハーディは過去と現在を常に対比しており、過去は宗教的環境での子供の頃のクリスマスイヴを表わし、現在は我々に不確実性と第1次世界大戦における作者の社会に対する矛盾を示している。

次に代名詞を見てみる。クリストールの人称代名詞の定義を参照する。

The personal pronouns occur more frequently, and have more special characteristics than

any other type of pronoun. They are called ‘personal’ because they refer to the people involved in the act of communication. Crystal D. (1993) (136)

人称代名詞はより頻繁に使用され、他の種類に比べて多くの独特の特徴がある。それらの代名詞は personal と呼ばれ、コミュニケーションの行動において人々の関わり合いを指している。1人称は伝達の語り手あるいは書き手を含んでいる。2人称は受信人を含み、しかし語り手、書き手を含まない。

クリストールが述べているように、人称代名詞はより頻繁に使用されている。人称代名詞に焦点を当て、これらの詩の中で伝達の行為において登場人物がいかに関わり合っているか分析する。

**表 2** 代名詞の分析結果

Personal pronouns Analyses : Methodology of Crystal D. (1993)

	1 人称 1 <sup>st</sup> person pronoun	2 人称 2 <sup>nd</sup> person pronoun	3 人称 3 <sup>rd</sup> person pronoun
1 連	1	—	2
2 連	2	—	3
3 連	1	—	—
4 連	1	—	2

最初の 2 連において、語り手は人称代名詞—1 人称—複数形 we で記述されている、最後の 2 連においては we は人称代名詞—1 人称—単数形の I に置きかえられている。最初の 2 連は話し手の幼少時代を表わし、we は oxen の伝説を語った年配者を示している。最後の 2 連での I は語り手が現在に位置している事を示している。代名詞 We から I への変化は価値観の変化、つまり、語り手が当時のクリスマスイブの雄牛でさえひざまずく、あるいはその事を疑いもせず信じる当時の社会的環境から、代名詞 I はその輪から離れる、決別を表わしている。

最初の 2 連で the oxen は人称代名詞、3 人称、複数形 they で記述され、3 連においては、they は the oxen 名詞に置きかえられている。具象名詞は我々に明確なイメージと印象を示し、当時の状況をヴィジュアルなものにしている。3 連の代名詞 someone が 4 連で人称代名詞、3 人称単数形、him に置き換えられており、誰かから彼に変化し、より具体性を帯びている。

次に助動詞に焦点をあて、詩の中での助動詞の役割について分析し、語り手の心的態度を考察したい。

クリストールの Modal verbs 助動詞の定義を参照する。

The function of the modal verbs (will, may, etc.) is to reflect our judgment about whether

what we say or write is true. They express a wide range of meanings. Crystal D. (1993) (86)

1 連, 2 連において助動詞が使用されていない。これは, 事実の声明であり, 我々読者に強い印象を与え, 明白性が感じられる。3 連において, 可能性, 意思 (決意), 予言を示す *would* が使われており, 語り手の可能性や希望等, 複雑な胸中を感じさせられる。

“*would*” is often little more than a marker of unreal condition. However, it can also express the Root meaning, hypothetical ‘Volition’. Coates J. (1983)

コートが ‘*would*’ はしばしば非現実的な状況のほんの標識にすぎない, しかしながら, 根本的な意味, 仮説的な意志も又表現することができると記している。

ここに仮説的意味の含みがあり, これは *oxen kneeling* と関連している。一方, 4 連で, 2 つの助動詞義務を指す *should*, 可能性についてより少ない確実性を示す *might* が使われている。marginal modal verb 周辺の法助動詞 (動詞としての語形変化が不完全な助動詞) で過去の習慣を指す *used to* が用いられている。

“*should*” is essentially an independent Modal, with no past reference, yet it is formally the past tense of *shall*. Palmer F.R. (1979)

パーマーが *should* は基本的には独立した助動詞であり, 過去を指示するものではなく, 形式的には *shall* の過去時制であると言っている。

ここでは *should* は意味的には現在時制として用いられており, 語り手の強い意志が感じられる。

## II

次に *Hap* を検証する。この詩は, *some vengeful god* “ある執念深い神が空からわたしを呼び, あざ笑う。汝苦しむ者たちよ, おまえの苦しみはわたしのエクスタシー, つまり喜びである。おまえの愛の喪失は, わたしの憎むべき益なることである” という語りかけで始まっている。

表3 *Hap* 偶然なる運命  
時制の分析結果

	1 <sup>st</sup> stanza	2 <sup>nd</sup> stanza	3 <sup>rd</sup> stanza
Present tense (state)	2	—	—
Present tense (habitual)	3	1	3
Present tense (instantaneous)	—	1	1
Past tense (state)	—	—	1
Past tense (event)	1	2	1
Past tense (habitual)	—	1	—

1連において、1行目以外、現在時制 (laugh, know, is, is) が使用されている。語り手はある執念深い神に訴えており、神の言葉は現在時制で完全に記述されている。続けて、語り手は運命について悪い神に嘆き悲しんでいる。過去と現在時制が混在している。語り手は何者かに支配されている理由、またこの世の矛盾を捜し求めている。この詩のテーマは神への抵抗であり、盲目意思の確立であると推察する。ハーディ自身の神の概念が表わされ、ここに登場する神は愛の神ではなく、執念深い神であり、救いの神ではない。

2連において、語り手は自分の運命を神と彼自身に対して嘆き悲しみ続けている。ここで、現在時制の *clench*, *die* 以外、多くの過去時制 *would bear*, *steeled*, *had willed*, *shed* が使用されている。語り手より強大な存在が起こした行動に関して語る時に使用されている。これは神の死、彼自身の神への絶望感及び喪失感を表現しているのではないかと推察する。

3連において、1行目の *primary verb* が省略されている。続けて、語り手は運命について訴えている。語り手が現在直面している不満を多くの現在時制 *arrives*, *lies*, *unblooms*, *obstructs*, *casts* を使用して説明している。これは語り手の現在の心境を明白性と現実性を強く表現するために役立っている。

表4 代名詞の分析結果

	1人称 1 <sup>st</sup> person pronoun	2人称 2 <sup>nd</sup> person pronoun	3人称 3 <sup>rd</sup> person pronoun
1連	3	3	—
2連	4	—	1
3連	1	—	1

人称代名詞1人称単数形Iは、詩全体を通して使用されている。語り手であるIは彼の感情をCrass Casualty（愚かな偶然）とpurblind Doomsters（運命の司）に向けて語っている。1連において、2人称であるThouとthyが使われている。ある神が語り手に語る時に用いられている。この神は意図的に唯一神つまりキリスト教の神Godではなく、小文字のgod神が用いられている。これはハーディのキリスト教への不信感、あるいは他のこの世を支配している巨大な意志を表現していると推察する。

1連、2連において、可能性、予言（意思）を示す助動詞wouldが2度使用されている。3連で、助動詞が全く使用されていない。13行目のhad以外、単純現在形、arrives, lies, obstructs, casts, unbloomsが使用されている。我々は話し手自身のcrass casualty 愚かな偶然（insensible chance）知覚のない偶然に対しての強い確実性、つまり、確信を見る事ができる。

“The poem presents the Doomsters, Crass Casualty and dicing Time as mechanical processes, purposeless and purblind to human hope or suffering.” Bailey J.O. (1970)

ベイリーがこの詩は人間の希望、あるいは困難に対して目的のない、鈍感な唯物主義的な過程として、愚かな運命、知覚のない偶然、サイコロをなげる時を表わしていると記している。

これは、ハーディのこの世の矛盾に対する絶望感、神の存在を感じる事の出来ない様々な試練と人間の愚かな運命及び知覚のない偶然が起こす悲劇など、当時の時代背景、つまり、急激な社会の価値観の変化に対する人間の変容と深く関連している。

### III

次に、*Neutral Tones*を検証する。語り手はある地点を回想しており、この詩を通して、過去においてのある女性との関係を描写している。この詩は1867年に書かれており、ベイリーはこの詩はいとこであるTryphena Sparksへのハーディの愛の危機を表現していると語っている。

この詩は表面上は愛の詩であるがごとくに見えるが、実は題が示すように、Neutral Tones 曖昧な傾向、語調はハーディの曖昧性を示していると推察する。Chidden of God, God-curst sun 等、God の語句を使用するときは唯一神の神が用いられ、しかし、叱責された、呪われた等、非常にネガティブな語彙を使用しており、神への不信感及びネガティブな感情が感じられる。

**表 5** *Neutral Tones* 中立的色調

時制の分析結果

	1 <sup>st</sup> stanza	2 <sup>nd</sup> stanza	3 <sup>rd</sup> stanza	4 <sup>th</sup> stanza
Present tense (instantaneous)	—	—	—	2
Past tense (state)	2	1	1	—
Past tense (event)	3	3	1	2

1 連において、過去時制 stood, was, lay, had fallen, were が完全に使用されている。続けて、2 連において過去時制 were, rove, played, lost が全て使用されている。3 連において、現在時制 deceives, wrings 過去時制 shaped, edged がそれぞれ使用されている。ここではハーディが彼の恋の絶望的危機を思い起こし、彼のテュライフィーナへの気持ちを表わしていると推察する。

**表 6** 代名詞の分析結果

	1 人称 1 <sup>st</sup> person pronoun	2 人称 2 <sup>nd</sup> person pronoun	3 人称 3 <sup>rd</sup> person pronoun
1 連	1	—	1
2 連	2	1	—
3 連	—	1	—
4 連	1	1	—

1 連で、人称代名詞、1 人称複数形 we が使われている。We は Tryphena と Hardy を指している。2, 3, 4 連において、人称代名詞 me, us, me が用いられている。また、your eyes, our love, your face の所有代名詞が使用されている。語り手は過去の思い出を振り返っており、Tryphena との恋愛の絶望感を描写していることがわかる。



この詩において、助動詞は全く使用されていない。ハーディは彼自身のメッセージを直接伝えていることを示している。この事は、助動詞を意図的に使用しない事により、語り手の強い意思が示されている。話し手は回想し、直接的に過去の事実を描いている。ほとんどの文は助動詞なしの過去形が使用されており、含み、予期、可能性を表わす助動詞はなく、明確な事実の描写であり、ハーディの絶望的現実性を表わし、読者に強い印象と絶望感を与えている。

次に節の構造を見てみたいと思う。ここでは特に、節の分析にベリーの的方法論 Systemic grammar (体系文法) を使用したい。

まず、Systemic grammar の概念について。

一連の体系に基づく文法的分析のアプローチ。それぞれの体系は一組の選択からなり、発話 (UTTERANCE) の産出においては、それぞれに関連した時点でそのうちの 하나가選択されなければならない。たとえば、英語では、話し手や書き手は数 (NUMBER) の体系で単数か複数を、時制 (TENSE) の体系で過去か現在か未来を、法 (MOOD) の体系で平叙文か疑問文か命令文を、また他の多くの体系で選択する。参考文献：Berry 1975 Systemic Linguistics (371-372)

Readers familiar with traditional grammars will have realized that, in its handling of this kind of structure, systemic grammar does not differ very much from earlier grammars. The main difference is the inclusion of the traditional 'object' under the heading of complement. Systemic grammar does, in fact, recognize the distinction between the traditional object and the traditional complement, but does not consider it sufficiently clear-cut to be introduced in the initial stages of an analysis. Berry M. (1975) (64)

ベリーがここで体系文法と伝統文法の主な違いは補語の頭の下に伝統文法の目的語を含むことであり、体系文法は実際上、伝統文法の目的語と補語の間の区別を認知する、しかし、分析の最初の段階において明確に、十分に検討しないことを述べている。

S-Subject P-Predicator C-Complement A-Adjunct

A subject is the part of a sentence which answers the question 'Who or what?' in front of the verb.

A predicator is the verb part of a sentence.

A complement is the part of a sentence which answers any question 'Who or what?' (or, if one wishes to be pedantic, 'Whom or what') after the verb.

An adjunct is the part of a sentence which answers any question other than 'Who or what' after the verb. Berry M. (1975) (64)

表7 主節の構造の分析結果 *The Oxen*

Clause Structures Analyses: Methodology of Berry M. (1975)

	主節の構造 Main Clause Structure
1 連	A+A+A+S+P+C+A S+P+C+A+A
2 連	S+P+C+A+A
3 連	C+S+P+A S+P+A S+P+C+C
4 連	A+A+S+P S+P+C+A P+C

表8 主節の構造の分析結果 *Hap*

	主節の構造 Main Clause Structure
1 連	S+P+C+A P S+P+C+C
2 連	A+S+P+C P+C P S+P P+S+A+C
3 連	P+C A+P+C+C A+P+C S+P+C S+P+C S+P+A+A

表9 主節の構造の分析結果 *Neutral Tones*

	主節の構造 Main Clause Structure
1 連	S+P+A+A S+P+C+A S+P+A S+P+A P+C
2 連	S+A+P+A+C S+P+A+A+C
3 連	S+P+C+C S+P+A+A
4 連	A+S+P+C+C+C+C+C

*The Oxen*, *Neutral Tones* の2篇の詩において、我々は詩の節の構造においてS P Aの類似のパターンを見ることができる。付接詞 *adjunct* が頻繁に使われている。ハーディが強烈に過去を回想しているのが、節の構造に表われ証明している。*Hap* では、語り手は *unfeeling power* に対して彼の感情を宣言している、それゆえ、多くの目的語補語がこの詩において使用されており、SPCのパターンが多く見られる。節の構造の複雑性に関し、各々の詩において、従属節のある複雑性を見ることができる。詩の主題は非常に複雑で大きい。従って、彼の概念は節の複雑性に反映しており、関連性が深いと推察する。

#### IV

表10 名詞句の分析結果  
Analyses of Noun Phrases

	Simple Noun Phrase 単純名詞句	Complex Noun Phrase 複合名詞句
Oxen	18	9
Hap	18	9
Neutral Tones	21	12

3篇の詩において、ハーディが複合名詞句より、単純名詞句をより多く使用していることを証明している。3篇とも単純名詞句が複合名詞句の約2倍使用されており、文脈の中で名詞句の単純性を見ることができる。

**表11** 単純動詞句の分析結果  
Analyses of Simple Verb Phrases

	The Oxen	Hap	Neutral Tones
base form	4	6	2
-s form	—	4	2
-ing form	—	1	—
ed form	5	4	10
Total:	9	15	14

**表12** 複合動詞句の分析結果  
Analyses of Complex Verb Phrases

	The Oxen	Hap	Neutral Tones
Modal Auxiliary Verb & Lexical Verb	3	2	—
Primary Verb & Lexical verb	2	1	2
Other verb & Lexical verb	1	1	—
Total:	6	4	2

ハーディは複合動詞句より、より多くの単純動詞句を使用している。*The Oxen*において、15個のうち9個の単純動詞句を使っている。*Hap*は19のうち15、*Neutral Tones*では17のうち14、使用している。単純動詞句を4つに分類した。base form (基本形), -s form (3人称単数形), -ing form (進行形), ed form (過去形), 12の base form, 6の-s form, 1の-ing form, 19の ed form になる。base form と-s form は現在の状況を示し、表現している。一方、*The Oxen*, *Hap*, *Neutral Tones*において、過去時制で19の ed form を使用している。語り手は過去の出来事を記述し、回想している。

詩の中で注目すべき顕著な独特な特徴がある。特に、名詞句と動詞句が非常に単純である。しかしながら、節の構造はより複雑である。文法上に単純性と複雑性の対比がある。これは単純性が複雑性を生み出していることを示している。ハーディのパターン化されたスタイルが、彼の詩の内面的複雑性を確立していると考えられる。スタイルはシンプルであるが、内的意味は非常に複雑で深く、ハーディの主題がコンテキストの中に非常に複雑に表わされている。

## 結び

今回、ハーディの3篇の詩を文法的に分析し、それぞれの詩の内容を考察してきた。

“A similar set of problems are involved in a poetry which, like Hardy’s attempts to preserve the past, to register its presence, and to superimpose past and present in order to measure the passing of time.” Armstrong T. (1993) (27)

アームストロングが類似した問題の傾向、例えば過去を保護する、現在を記録する、また過ぎゆく時を示すために、過去と現在を重ね合わすハーディの試みが、詩において関わっていると言っているが、これはハーディの文体と関連していると思う。過去と現在を重ね合わすハーディの試みは彼のスタイルを確立している。様々な分析を通して、ハーディの過去に対する強い執着心の再確認、特に、時制は過去に対する彼の強い感情を示している。常に語り手は現在に位置しており、過去を回想し、常に過去を描き、追想している。過去と現在を重ね合わす事により、常に過去と現在の対比がある。そこにハーディの試みと心情を読み取る事が出来る。

そこで、ハーディ自身のスタイルについての定義を参照して見てみたいと思う。

Style, as far as the word is meant to express something more than literary finish, can only be treatment, and treatment depends upon the mental attitude of the novelist; thus entering into the very substance of a narrative, as into that of any other kind of literature. A writer who is not a mere imitator looks upon the world with his personal eyes, and in his peculiar moods; thence grows up his style, in the full sense of the term... Those who would profit from the study of style should formulate an opinion of what it consists in by the aid of their own educated understanding, their perception of natural fitness, true and high feeling, sincerity, unhampered by considerations of nice collocation and balance of sentences, still less by conventionally accepted examples (Life and Art.) Hynes S. (1956) (71)

ここで注目すべき事は、ハーディがスタイルに関して大事なことは作家の精神の姿勢によるものであり、また作者の考えを明確に表わすべきであることと断言している。

“By the end of the poem the speaker seems to look back at a disappearing world with some mixed feelings and in a kind of suspension between belief and disbelief, between knowing and unknowing.” Carter R. (1993) (118)

カーターが *The Oxen* の詩の終わりの部分には、語り手は信仰と不信仰、知ることと知らな

いことの間で、ある種の宙ぶらりんであることの、ある種の混じり合った感情で消えゆく世界を回想しているように見えると分析している。

つまり、ハーディは自分自身の信仰と照らし合わせ、信じ切ることのできない悶々とした苦しみと当時のキリスト教信仰の確立された道徳観の間で悩み、つまり、過去の確実性（宗教的価値観の確立）の消えゆく世界、つまり宗教的、道徳的世界と現在の不確実性（価値観の喪失）の狭間でもがき苦しみ、あるいは複雑な感情を持って回想していると考察する。

第2に、ハーディが盲目的意思—宇宙意思に執着していることに気づく。盲目的意思の主題が詩の中に強く示されている。この主題と対照に、多くのキリスト教に関連した宗教的語彙を使用している（Christmas Eve, flock, meek mild creatures, kneeling, vengeful god, pilgrimage, chidden of God, God-curst sun）。ここにアイロニーがある。我々は宗教に対する信仰と不信仰の間で揺れ動くハーディの宗教観、あるいは宇宙観、この世を支配する見えない意志との戦いの中で生きるハーディ自身の内的感情が詩において深く描写されている。

ハーディが非常に真剣に宗教的、またはキリスト教的なものを題材にしているところが興味深い。宗教的、形式的な彼の生き方が彼の本質へと入り込み、彼の文体へと強く影響を与え、彼の詩の伝統的スタイルを確立している。

そして最後に、始めにも述べたように、文法のみで彼の詩を解釈できないことは承知しているが、ハーディのキリスト教に対する彼の関心、及び内的格闘を通して得た彼自身の宇宙観が文体上に表われ、彼の戦略的に使用している文法のスタイル、パターン性やシンプル性を見ることで、より深く彼の内なる複雑性と意思、及び彼の宗教に対する認識を改めて感じる事が出来た。

#### 参考文献

1. Armstrong T.(editor) (1993) *Thomas Hardy Selected Poems*, Longman group UK Ltd.
2. Bailey J. O. (1970) *The Poetry of Thomas Hardy*, The University of North Carolina Press
3. Carter R. & Nash W. (1993) *Seeing Through Language A Guide to Styles of English Writing*, Basil Blackwell, Inc.
4. Coates J. (1993) *The semantics of the Modal Auxiliaries*, Croom Helm Ltd.
5. Comrie B. (1986) *Tense*, Cambridge University Press
6. Crystal D. (1993) *Rediscover Grammar Eighth impression*, Longman Group UK Ltd.
7. Greenbaum S. & Quirk R. (1993) *A Student's Grammar of the English Language*, Fifth impression, Longman Group UK Ltd.
8. Hynes S. (1956) *The Pattern of Hardy's Poetry*, The University of North Carolina Press
9. Halliday M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold, A Division of Hodder and Stoughton Ltd.
10. Huddleston R. (1988) *English Grammar An Outline*, Cambridge University Press
11. Palmer F. R. (1980) *Modality and the English Modals*, Second impression, Longman Group UK Ltd.

12. Pinion F. B. (1989) *A Thomas Hardy Dictionary*, The Macmillan Press Ltd.
13. Radford A. (1989) *Transformational Grammar*, Cambridge University Press
14. Verdonk P.(editor) (1993) *Twentieth-Century Poetry from Text to Context*, Routledge pp.57-67
15. Young D. J. (1980) *The Structure of English Clauses*, Hutchinson & Co. (Publishers) Ltd.
16. 荒木一雄編, (1999) 英語学用語辞典 三省堂
17. H.C. グフィン著, 山本文之助訳 (1978) 第3版, トマス・ハーディ論 株式会社千城
18. J.O. ベイリー著, 山本文之助, 関口博共訳 (1978) 初版, トマス・ハーディと宇宙精神 株式会社千城
19. 森松健介訳 (1995) 初版, トマス・ハーディ全詩集 I 前期4集 中央大学出版部
20. 森松健介訳 (1995) 初版, トマス・ハーディ全詩集 II 後期4集 中央大学出版部
21. J. リチャーズ/J. プラット/H. ウェーバー著, 山崎真稔/高橋貞雄/佐藤久美子/日野信行共訳 (1999) 8版, ロングマン応用言語学用語辞典 南雲堂